

入選

人の心をたすける人になりたい

山口県 浅江小学校 二年

貞弘 竜之介

ぼくのお父さんとお母さんは、ごはんやさんをやっています。コロナウイルスがはじまったときは、とてもこわいびょうきとみんな思っていたので、おきやくさんやかぞくがうつらないために、お店をしめたり、しごとができるようになって手あらいがいや、しょうどくなど、とてもがんばっていました。

そんなとき、ぼくがコロナにかかってしまいました。ぼくは、あんなにがんばっているお父さんやお母さんやお姉ちゃんたちを見ていたので、とてもわるいことをした気持ちになってしまって、かぞくにおこられると思っていたら、みんな、

「だいじょうぶ?」「えらくない?」「くるしくない?」

と、やさしく声をかけてくれて、ぼくのそばにいてくれました。

そのあとすぐに、弟と妹にもうつり、お姉ちゃんたちはうつらないように、お母さんがかんせんたいさくと言って、トイレやおふろのしょうどく、ごはんもべつべつに作っていました。お母さんに、

「お母さんは、なんでうつらないの?」ときいたら、

「お母さんはつよいから。」

と言っていたけれど、お母さんは、ぼくが元気になりはじめたときに、40どのねつが出ました。それでも、かぞくのおせわをしていたので、ぼくは、ほんとうにお母さんはつよいと思いました。

そして、お父さんとお母さんはごはんやさんなので、コロナにかかったら、なおってもおきやくさんがへってしまうかもしれないけれど、おきやくさんみんなに、

『コロナウイルスにかかってしまいました。お店は、ぜんいんなおるまでおやすみします。』

と、ラインやインスタグラムでほうこくしました。ぼくはお母さんに、

「だいじょうぶ?」ときいたら、

「お母さんのおきやくさんは、わかってくれるからだいじょうぶだよ。」

と言っていました。

その日から、まい日たくさんのおきやくさんが、げんかんのそとにたべものなどをもってきてくれて、お母さんは、

「うれしいね。だれかがこまっていたり、ふあんになっていたら、できることをやってあげたいね。」

と、なっていたので、ほんとうはお母さんもふあんだったんだな、と思いました。

今はもう、コロナはあんまりこわいびょうきではないけれど、コロナだけではなく、なにかふあんな人や、こまっている人がいたら、むししたりわる口を言ったりするんじゃないかと、

「だいじょうぶ?」

と声をかけてあげて、なにかぼくができることを考えて、その人の心をたすけてあげられる人になりたいな、と思いました。